

(9)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

バングラデシユの首都ダッカでこの原稿を書いている。一昨日まで、今年は雨が少ないと街行く人々は話していたが、昨夕からはバケツの底が破れたような大雨。河川がはらんらんし、街中が水没したかのような様相を呈している。

ダッカを訪問したのは11年ぶり。この間に街は大きく変ぼうしていた。市街地には高層ビルがそびえ、自動車は以前と比較にならないほど新しくなっていた。

変わらないものもあった。街の喧騒(けんそう)と子どもたちの姿だ。子どもという言葉が発するとき、しばしば驚かされ、また新たな感動を覚えることがある。豊かな想像力であったり、「生きる」ということへの問いかけであったり。



やまもと たい ちろう
山本 太郎

セミの真実

乗って天国へ行くんだ。月にも行けるよ。天国は雲の上だからね」と言ったら5歳になる息子。木の根っこ近くに、土中からはい出てきたセミの幼虫を見つけた。「家で飼いたい」と言い張る。「セミはね、大人になったら、朝、目覚まし代わりにジージー鳴くんだよ」と。結局、セミの幼虫を家に連れて帰った。翌朝、息子が「セミの声がうるさくて眠れない」と寝言。

り。そんなことを感じるいくつかの出来事があった。皆既日食の日のことだった。「太陽を捕りたいな。そしたら太陽に

どんな夢を見ているのか。カナブン、カミキリムシ、ヤゴ、メダカ。生き物を見つけては「観察したい」と連れ帰るが、なかなか

まく育てられない。死なせてしまうこともある。寿命のこともあれば、世話の焼き過ぎ、ちよっかいの出し過ぎが原因のこともある。「冒険広場」という名前の付いた近所の原っぱで、休日ごとにポランティアとして一緒に遊んでくれるお兄さんたちがいる。その一人が言った。「僕たちもそうして付き合おう。命を覚えてきたんだ。そうして命の大切さを覚えるのかもしれないね」。翌朝、セミの幼虫は背中が割れ、羽が出かけたところで息絶えていた。小さな庭にセミの幼虫の墓が一つ増えた。そこに草花の種をまいた。春になったらオレンジ色の花でいっぱいになる。そんなことを期待して。

(長崎大熱帯医学研究所教授)